

---

# 横山百合子先生を送る

福岡万里子

---

歴史研究系の横山百合子先生が当館（以下、歴博と略）の日本近世史担当として着任されたのは2015年秋であった。筆者も前年春という相前後した時期に採用され、その関係から先生に親しみを感じる一方で、先生の並々ならぬキャリアには常に尊敬の念を抱き続けてきた。5年間という短い期間であったが、先生と業務をともにすることで、多くのことを学ばせて頂き、特に先生の学識はもちろんのこと、研究活動への真摯な取り組みを間近に拝する機会を得られたことは、筆者の無上の喜びとするところであった。先生をもうお送りせねばならぬなか、先生がこれまでに組み込まれたご業績を振り返ることで、先生への送別の辞としたい。

先生は東京のご出身で、1979年3月、東京大学文学部第2類国史学科を卒業され、同年4月、神奈川県立旭高等学校の社会科教諭となられた。以降17年間、社会科教育から、クラス担任、部活、生活指導、様々な行事、生徒会まで、多岐にわたる教育活動を、ご自身の子育てと両立させながら行い、尽力してこられた。その後1996年に転機が訪れる。その年、神奈川県で新設された無給研修制度により、母校の東京大学日本史研究室の門を再びたたき、その大学院（東京大学大学院人文社会系研究科日本文化研究専攻日本史学専門分野修士課程）に入学されたのである。同課程では吉田伸之先生の指導の下、修士論文を執筆された。その後、学問を極める決意を固められ、さらに同専攻の博士課程に進学し、1999年に神奈川県立大師高等学校を退職された。そしてその間、東京大学大学院人文社会系研究科ティーチングアシスタントや山梨県立女史短期大学非常勤講師を務めつつ、博士論文の執筆を進められた。2003年3月、博士課程を単位取得満期退学され、同年4月より東京都公文書館史料編纂係事務補佐員として『東京市史稿』編纂に従事されながら、同年6月に博士論文を提出、11月に博士号を取得された。のち立教大学文学部兼任講師を経て、2007年4月、千葉経済大学経済学部経済学科教授に就任、次いで2010年4月、帝京大学文学部史学科教授となられた。この間やその後、千葉大学教育学部や千葉経済大学、大阪市立大学大学院文学研究科、東京大学文学部などで非常勤講師を務められた後、2015年11月、当館研究部歴史研究系教授に着任された。

先生にとって転機となった1996年以降、今年は四半世紀となる。その間に先生が切り開いてこられたご業績の多様さには、瞠目すべきものがあり、その射程は広大である。それを三つの分野に分けるとすれば、近世及び近代への転換期の身分論研究へのご貢献、女性史・ジェンダー史の視点からの近世史・明治維新史研究の開拓、そしてジェンダー史をめぐる共同研究を通じた新境地の開削、になるであろう。以下、内容を紹介したい。

戦後、近世史研究の中で、身分制社会論は長足の進歩を遂げた分野で、特に90年代以降は身分的周縁論を中心に、多様な社会実態を踏まえた社会構造論として深化してきた。第一の分野におけ

---

る先生のご業績は、この近世身分制研究や都市史研究の諸成果を踏まえ、明治維新时期における近世身分制の解体過程を近世史の視点から描き直し、その特質を解明してきたことにある。そのもっともまとまった成果が、先生の博士論文を元とする単著『明治維新と近世身分制の解体』（山川出版社、2005年）である。同書は、近世後期から明治初年における戸籍政策の実態と変遷を、膨大な一次史料から再構成することを通じ、近代への移行期における社会構造の変容と権力の社会掌握の動向を、それがはらんでいた矛盾とともに明らかにした。その後発表された論文「賤民廃止令と制定理由とその歴史的位罫」（『東京大学日本史学研究室紀要』、2010年）は、同書で解明された、明治初年の華・士・卒籍や平民籍の戸籍政策・統治上の諸問題と同様の矛盾が、第三の賤民籍の統治についても表出し、賤民廃止令の制定につながったという見通しを打ち出した。先生はこれらの業績により、明治維新が結果させた近世身分制の全面的撤廃が、維新政府の当初からの意図というよりは、近世身分制を再編し単純化した上で引き続き身分の枠組みに添った統治を行おうとしていた当初の方針が、実際の実施過程で越えがたい矛盾に直面し、それを止揚する策として身分制の全面撤廃が招来されたという斬新な見方を提示された。

こうした戸籍政策論からする明治維新史の再解釈と並んで、先生は、幕末維新时期の江戸・東京における武士・町人身分や社会構造の実態分析を行われている。朝臣化した下層の旧幕臣の維新时期サバイバルや、神田柳原土手通りの床商人の地稅上納運動、旧武家地の解体・再編過程などを、近世身分論・都市社会論の諸成果を踏まえて読み解いたそれらの研究は、明治維新史を、市井の名もなき無数の人々の視点から生き生きと描出することで、政治史中心に描かれてきた維新史を新鮮に塗り替えるものとなった。そのエッセンスは、後述する女性史・ジェンダー史の成果とともに、最新のご単著『江戸東京の明治維新』（岩波書店、2018年）に凝縮されている。

第二の分野のご業績は、女性史・ジェンダー史の視点からのものである。アカデミズムにおけるジェンダー概念の導入は、上野千鶴子の研究に代表されるように、社会学の分野で先行し、それに触発される形で、ジェンダー概念を取り入れた歴史学的議論も試みられるようになった。しかしこれらの研究潮流における構築主義的な議論と理論先行の演繹的分析手法は、別個に長らく蓄積されてきた実証史学的手法とは親和し難いものがあり、その結果、ジェンダー史学の試みは歴史学の分野において、まま孤立を強いられてきた。この先駆的ジェンダー史学と実証史学との深い溝を架橋し、実証史学的手法に基づくジェンダー史のあり方を切り開いてきたのが、先生の第二の分野での業績と言える。

その仕事は、近世の新吉原遊郭における遊女の実像とそれを取り巻いた社会構造、そして維新时期の芸娼妓解放令の制定過程に迫った諸研究や、近世における髪結と女髪結のあり方の差異及びその維新後の変化に焦点を当てた研究などに代表される。それらに共通するのは、決して潤沢とは言えない近世～維新时期の女性史史料を、同時代の社会構造を再現してその中に埋め込み、既存の近世身分論や維新史研究の諸知見を吸収した上で分析することにより、翻って既存研究が提示してきた歴史社会理解の内奥に切り込む新視点をもたらしている点である。それを通じ、近世身分研究、維新史研究のジェンダー視点からの読み直しの実証史学的成功例を、鮮やかに示された。

以上のご研究は、歴博に着任される以前に発表されたものも多いが、第三の分野は、歴博という環境を最大限に活かして切り開かれたものである。すなわち先生は、2016年以降、基盤研究「日

本列島社会の歴史とジェンダー」を立ち上げられ、内外の24名もの研究者を糾合して、日本列島の歴史をジェンダーの視点から更新することを目指した共同研究を主宰された。それは古代史から近現代史まで、また歴史学から民俗学・美術史学まで、ジェンダー史研究に深い造詣と実績を持つ研究者と、初めてジェンダー概念に向き合う研究者とから成る混成メンバーから構成された。かくも多様な時代・分野をまたぐ大所帯の共同研究は、通例ならば相当困難な運営となり、それだけ成功も難しいように一見予想されるが、先生はこれを見事に成功させ、自由で闊達で刺激的な共同研究を実現させた。期間中には「歴史展示におけるジェンダーを問う」(2017年)、「東アジアにおける文字文化とジェンダー」、「買売春と社会」(2018年)という三度にわたる国際研究集会も行われた。こうした共同研究の多産性は、絶妙な四つの切り口(文字／文体、衣料生産／流通、セクシュアリティ発現の場、社会集団)を設定したゆるやかな課題設定の巧みさや、男女の性差という時代・分野を超えて存在する主題の根源性といった背景もさることながら、高等学校教育とアカデミズム、近世史と近代史、実証史学とジェンダー論といった数々の異文化間の溝を、その人格的包容力で鮮やかに乗り越え架橋し、成果を挙げてこられた先生であるからこそ、成し遂げることができた偉業であると思う。

その集大成が、2020年10月から12月にかけて行われた企画展示「性差の日本史」であった。それは共同研究よりさらに多い29名の展示プロジェクト委員から構成され、「政治空間における男女」、「仕事とくらしのなかのジェンダー」、「性の売買と社会」という3つのテーマから、日本列島社会の歴史における各時代のジェンダー構造とその変化を、各時代に生きた女性たちの声や経験を散りばめながら描き出すものとなった。プロジェクト委員自らが手がけたツイッターなどによる情報発信も相乗効果をもたらし、その社会的反響は極めて大きいものとなった。それはコロナ禍の下で入場制限・予約制を敷いての企画展示となったにも関わらず、平時を越える2万人超の入場者数を記録したことや、展示期間を通じて引きも切らなかつたマスコミ取材の波、寄せられたアンケート回答の異例の多さ(1,146件)などから、端的にうかがうことができる。「先輩の女性たちの2000年の歴史に勇気をもらった」、「一字一句も読み落とすまいという思いで最初から最後まで徹底的に見た展示はこれが初めてです」といった、ツイッターに寄せられた反響の声からは、この企画展示が、来館者自身の性差をめぐる切実な経験に即して受け止められた事例の多さを物語っている。

先生はこの他、歴博において、ご着任以来、寺子屋れきはくの登録ボランティア活動の指導に当たられ、来館者と歴博をつなぐ豊かな活動を支えられてきた。先生が行うボランティア研修は、その厳密で高度な実証論文とは打って変わって、とても柔らかな口調で、難しい問題もかみ砕いて初歩から説き起こすものであり、ボランティアの方々には大きな人気を誇った。高等教育において経験を積まれた上でアカデミズムを極められた先生であるからこそその境地であったと思う。社会活動においては、数々の高校用日本史教科書の執筆に関わられたほか、歴史教育者協議会編『学びあう女と男の日本史』(青木書店、2001年)、総合女性史研究会編『新日本女性通史』(朝日新聞出版、2010年)の編集企画・執筆者選定・執筆を担当され、大学・市民向けの家族史・女性史通史教材の実現に尽力された。

同僚としての先生は、いつも朗らかで慈愛にあふれ、研究面でも業務の面でも経験の浅い筆者

---

を温かく受け止め、励まして下さる存在であった。先生がリードして下さり、私も分担執筆した『わくわく探検！れきはく 日本の歴史3 近世編』（吉川弘文館、2017年）は、苦勞もあったが、先生との楽しい共同作業として心に残っている。そんな先生を今や送り出さなければならないのは、とても辛いことである。先生のご業績を振り返り、先生が情熱を注がれてきた女性史・ジェンダー視点からの歴史の見直しは、専門の異なる私たちもまた、我が事として受け止めるべき課題であると感じる。先生が編まれたずっしりとした渾身の図録を、研究者として、そして自身一女性として味読しつつ、今後の展示や研究に活かしていく方途を考えていければと思う。